舌に発生した多発性顆粒細胞腫の1例

浅田 洸一・長谷川泰章・佐藤 徹・石橋克禮

A case of multiple granular cell tumor of the tongue

Koichi ASADA・Yasuaki HASEGAWA・Toru SATO

Katsunori ISHIBASHI

Abstract: Multiple granular cell tumors of the oral cavity are very rare. We reported clinical and pathological finding of two granular cell tumors on the left lateral border of the tongue in an 18-year-old female.

Key words: multiple granular cell tumor (多発性顆粒細胞腫)

はじめに

顆粒細胞腫は比較的にまれな疾患とされ、全身各部に孤立性に発生するが多発例はまれとされる¹⁾。今回左側舌縁に、2個の顆粒細胞腫の発生をみた症例を経験したので報告する。

症 例

患 者：18歳 女性。

初 診：平成3年6月■日。

主 訴：左側舌縁の腫瘍。

既往歴：特記事項なし。

家族歴：特記事項なし。

現病歴：約2年前より、左側舌縁に白い腫瘍があるのに気づいていたが放置していた。3か月前に歯科治療のために受診した近歯科で、舌左側の腫瘍の精査をすすめられ、来院した。

現 症：体格中程度、栄養状態良好で、顔貌正常。口腔内所見では舌背より両側縁にかけて溝舌を認める。左側舌縁中央部に小豆大、白色の弾性硬、境界はぼ明瞭、非可動性のわずかに隆起する腫瘍を認める。患者は気づいていなかったがその1cm 後方に前方部よりやや粘膜色をおびる白色の弾性硬、境界明瞭、非可動性、小豆大の腫瘍を認める(写真1)。いずれの腫瘍も自発痛、圧痛などは認めない。左右の顎下リンパ節は各1個で小豆大、可動性、軟らかで圧痛は認めない。

写真1 初診時所見

左側舌縁に2個の腫瘍を認める。

写真2 左：前方部、右：後方部腫瘍の組織所見 (H-E 染色, ×80)

顆粒を有する細胞がび漫性に筋層内に増殖。

臨床診断：左側舌縁良性腫瘍。

処置および経過：局所麻酔下に前方部の腫瘍周囲より3mm 離し、紡錘形の切開を加え切除した。同部の創傷治癒と病理組織診断を待って、後方部の腫瘍を前回同様局麻下に切除した。術後1年10か月経過したが再発を認めず、経過良好である。

鶴見大学歯学部第2口腔外科学教室

(主任：石橋克禮教授)

Second Department of Oral and Maxillo-facial Surgery, Tsurumi University, School of Dental Medicine (Chief: Prof. Katsunori Ishibashi)

受付日：平成5年2月17日

表 1 口腔内に発生した多発性顆粒細胞腫の報告例

報告者	年	年齢	性	部 位	その他
Arnn ⁸⁾	1957	36	男	上唇, 頬粘膜, 右舌縁 2 個	足, 腹部 外陰部
Lieberman ⁹⁾	1966	25	男	左舌縁 2 個, 右舌縁 2 個, 舌背	
Vance ⁴⁾	1969		女	舌 2 個	
			女	舌 4 個	
Strong ⁵⁾	1970	29	女	舌 2 個	
		29	女	舌 4 個	
		55	女	舌 2 個	
齊藤 ¹⁾	1984	38	女	左舌背, 右舌縁	
本報告例	1993	18	女	左舌縁 2 個	

病理組織学的所見：2 個の腫瘍とも類似の組織所見で(写真 2), 舌粘膜上皮直下に円形の核を有し, 細胞質内に好酸性顆粒を有する大小不同の細胞の集合を認める。深部では顆粒を認める細胞は筋層内にび慢性に増殖し, 辺縁部には被膜は認めない。2 個の腫瘍の被覆粘膜上皮にいわゆる pseudoepitheliomatous hyperplasia の所見は認めない。2 個の腫瘍周囲には筋組織を認め, お互いに独立した腫瘍を形成していた。

以上の所見より 2 個の顆粒細胞腫と診断された。

考 察

顆粒細胞腫は良性の病変であるが, 浸潤性の増殖を示す一方で発育が遅かったり, 再発がきわめて少ないなど, 自律的増殖を特徴とする真の腫瘍なのか, 反応性増殖や変性あるいは代謝障害などによるものか, いまだその本態は不明な疾患である。そのため, その組織由来についても不明で, 横紋筋説, 平滑筋説, 神経原説, 組織球説, 肥満細胞説, 線維芽細胞説, 未分化間葉細胞説, 多元説などがいわれており, そのうちでは神経原説が有力とされている²⁾。

本疾患の多発例の頻度についてみると, 欧米では 1 割前後の頻度³⁻⁵⁾であるのに対し, 本邦では白倉⁶⁾の 199 例の既報告の集計で 1 例 0.5%, 恒吉⁷⁾は自験例 48 例で多発例の記載がなく, 欧米の報告と多発例の頻度に差がみられる。欧米例の多発例の内訳をみると, 皮膚と皮膚, または皮膚と他部位など皮膚を含めた病変が多く, 口腔領域に限定して発生したものはきわめて少ない。

先天性エプーリスを除いた顆粒細胞腫の口腔領域多発例の報告についてみると(表 1), 年齢は 18 歳から 55 歳までにみられ, 平均 32.9 歳で, 単発例の皮膚発生例の平均⁶⁾より低く, 口腔領域例の平均¹⁰⁾よりやや高い。性差は女性：男性＝7：2 と口腔領域単発例より性差が大きい。好発部位については舌が多く, そのうちでは舌縁が多い。

腫瘍の個数についてみると, 皮膚などの他部位では 46

個や 31 個などの例もみられる³⁾が, 2 個例が多い。口腔領域でも 4～5 個などの報告もみられる^{4,5,8,9)}が 2 個例が多い。本例は左側舌縁に 2 個の腫瘍を認めており, 舌の同側 2 個の報告は, Arnn⁸⁾, Lieberman⁹⁾にもみられている。このように舌の同側に並んで腫瘍が発生するのは本疾患の発生源に関連して興味ある現象である。

このような多発例の報告の積み重ねは, 発生源不明な顆粒細胞腫の解明に電顕的観察や免疫組織化学的観察以外の側面から寄与するものと思われる。また一方で, 本邦と欧米での多発例の頻度の差が人種的なものなのか検索精度の差なのか, あきらかになるものと思われる。

む す び

左側舌縁に 2 個の顆粒細胞腫を認めた 1 例を報告した。

引用文献

1) 齊藤道雄, 古森孝英, 他：舌の両側に発生した顆粒細胞腫の 1 例。日口外誌 30: 879-883 1984。
2) 佐藤 徹, 浅田洗一, 他：口底部に発生した顆粒細胞腫の 1 例—免疫組織化学的, 電顕的観察—。日口外誌 33: 1548-1554 1987。
3) Moscovic, E.A. and Azar, H.A.: Multiple granular cell tumors (myoblastomas). Case report with electron microscopic observations and review of the literature. Cancer 20: 2032-2047 1967。
4) Vance, S.F. and Hudson, R.P.: Granular cell myoblastoma. Clinicopathologic study of forty-two patients. Am J Clin Pathol 52: 208-211 1969。
5) Strong, E.W., McDivitt, R.W. et al.: Granular cell myoblastoma. Cancer 25: 415-422 1970。
6) 白倉規子, 富澤尊儀, 他：Granular Cell Tumor の 1 例—本邦報告例 199 例の統計的観

- 察一. 皮膚臨床 29: 1261-1273 1987.
- 7) 恒吉正澄, 遠城寺宗知: 顆粒細胞腫に関する臨床病理学的観察. 福岡医誌 69: 495-505 1978.
- 8) Arnn, E.T. and Gordon, H.: Granular-cell myoblastoma. Report of a case with multiple sites of origin. Lab Invest 6: 142-147 1957.
- 9) Lieberman, A. and Simring, M.: Multiple granular-cell myoblastoma of the tongue. Report of a case. Oral Surg 21: 371-374 1966.
- 10) 重松久夫, 藤田訓也, 他: 舌に発生した顆粒細胞腫の組織化学的, 電顕的検討. 日口外誌 37: 2006-2014 1991.
-